

こんな指導計画の立て方がある

新しい指導を考える会

対話によって、一つ一つの出来事の中に、多くの人との関わり合いがあることを認識させ、自分が多くの人々に支えられて成長していることに気づかせ、感謝の思いをもたせるところに価値を置く。生徒たちは取材を進める中で、自分の記憶の中に、自分を支えてくれた親の存在や仲間の温かさを感じ、そのかけがえのなさに気づくであろうと考えた。

■活動について

本単元では、「自分史」を、世界でたった一枚の自分だけの新聞に収める活動を構想した。新聞を作成していくという活動を通して、生徒たちには、「情報を収集する能力」「情報を取捨選択する能力」「情報を再構成する能力」を主とした、情報を操作する力を身につけていきたいと考えた。

一つ目の「情報を収集する能力」は、取材活動を通して身につけさせていく。本単元での取材対象は、自分自身であるので、自分のアルバムや卒業文集などをひも解くことによって、過去の自分と向き合うことができる。また、保護者へのインタビューや仲間へのインタビューによって、他の人から自分に関わる情報を収集することもできる。

次に、「情報を取捨選択する能力」は、集めた情報の中から、どれだけの出来事やその内容を、新聞という限られた紙面に記載していくかを考えることを通して、身につけさせたい。ここでは、出来事としての自分の経験や感情を、言葉として蓄積しておくことが大切となってくる。

最後に、「情報を再構成する能力」は、言葉として蓄積された情報を、新聞という形式の表現にどう置き換えていくかを考えていく過程で身につけさせていきたい。

実践事例 ①

「総合的な学習の時間」と関連させた単元を創造する

「自分史を作ろう」(3年)

1 国語科の授業と「総合的な学習の時間」との関連

国語科教師として「総合的な学習の時間」の指導計画立案に携わったとき、その学習を組織する発想が、国語科の単元を創造する過程とよく似ていることに気づく。

どちらも「学び手の興味・関心・必要に根ざす話題をめぐって組織されるひとまとまりの価値ある活動」を通して、力を身につけさせていくことが必要になるからである。国語科とは、そのねらいに違いがあるものの、活動の主は、どちらも言語活動である。事実、他教科の教師から「新聞の作り方」や「話し合いの組織のしかた」など、ずいぶんと質問を受けた。「もともと、国語の授業で話し合いの方法を教えておいて欲しい。」などと求められたこともある。

つまり、国語科教師は「総合的な学習の時間」の指導計画作成やその指導に携わる部分がきわめて多いと言える。よって、国語科としての年間指導計画を立案する際には、「総合的な学習の時間」の指導計画を考慮に入れる必要が求められるのではないだろうか。

しかし、国語科が、どこまで「総合的な学習の時間」との有機的な関連を図ることができるのだろうか。その関わり方は、「年間を通して」「一単元で」「各活動で」など様々である。

「年間を通して」関わる際には、「協同学習」「美しい言葉の習得」など、ある程度、学校全体の目標として大きなテーマを掲げる必要がある。そして、そのテーマを追求していくため、全職員が共通理解し、年間指導計画を立案していかねばならない。

ただ、そこまで大きく展開することができない場合でも、「単元」「各活動」レベルでの関わり方を、今後、考えていくべきではないだろうか。

ここでは、ある一つの単元を抽出し、「総合的な学習の時間」とどのように関連させていくことができるかを述べたい。中学三年生で実践することが可能な「自分史を作ろう」をテーマとした単元である。

2 単元「自分史を作ろう」

■単元設定の趣旨

自分以外の事象に対しては、客観的な見方や考え方をもち、表現することができると生徒は多い。しかし、話題の中心が自分自身となると、書けない(書かない)、話せない(話さない)生徒が多くなる。それは、これまでの生活の中で自分について自分と対話するという経験、そして、その必然に置かれる状況が乏しいからではないかと考えた。

よって、自分を取材対象とする「自分史」を作ることによって、必然的に自己との対話を生み出す機会を作ろうとしたのである。

本単元は、三年生の二学期末から三学期にかけて、実践可能なものである。卒業を目前に控えた生徒たちは、自分自身の進路と向き合い、人生の中で最初の生き方の選択をしようとしている。その大きな選択は、時には自分を励ます目標ともなるが、時には大きな壁となり、生徒の心を揺り動かす。

自分の歩んできた歴史を振り返る「自分史」は、自己との

■単元の構想

「自分史を作ろう」(全十四時間)

《単元目標》

- 今までの自分の生き方を振り返り、未来に向かおうとする気持ちを自分史に書きまとめることができる。
- 自分に関する情報を集め、それを材料として文章を作成していくことができる。

《学習の流れ》

【第一次】(二時間)

・ 一年生の教科書で学習した『少年の日の思い出』を思い起こさせ、自分自身の「少年の日の思い出」を年代ごとのカードに箇条書きで書いていく。

【第二次】(四時間)

・ 教科書教材『握手』を振り返る。
・ 教科書教材『メディア社会を生きる』を学習する。

【第三次】(二時間)

・ 「自分史のすすめ」を読み、自分史の書き方を理解する。
・ 資料収集や整理・加工など、制作の見通しをもち、学習計画を立てる。
・ 新聞の作り方を学ぶ。

【第四次】(五時間)

・ アルバムや家族へのインタビュー、かつての作文などを材料として、自分史を書く。
・ 資料の活用や表現の仕方について仲間から学び、自分史に生かしていく。

【第五次】(二時間)

・ 書き上げた自分史を交流し合い、互いの作品を評価し合う。

学習材

- 少年の日の思い出(光村1年) ○ 新聞の特徴を生かして書こう(光村3年)
- 握手(光村3年) ○ メディア社会を生きる(光村3年) ○ 「自分史のすすめ」(自作資料)

▼「自分史新聞」生徒作品例



■「総合的な学習の時間」との関わり

本単元は、全十四時間として構想した。しかし、表に示した第三次・第四次の活動は、「総合的な学習の時間」との関連を図ることが可能となるため、国語科の授業に全十四時間をあてる必要はなくなる。

国語科と「総合的な学習の時間」相互に共通する学習内容を明確にし、関連を図ることができれば、国語科の少ない授業時数にも十分対応していくことができるのである。

「総合的な学習の時間」と単元自体を関連させる場合

三年生の「総合的な学習の時間」を「生きる」「生命」などの大きなテーマで構想している場合には、「総合的な学習の時間」の取材活動と国語科本単元とを関連させて、第四次の「情報の整理・加工・再構成・自分史作り（新聞作り）」を「総合的な学習の時間」に行うことができる。

そうすることによって、第四次で扱う五時間は、「総合的な学習の時間」との関連によって削減され、そこで作り上げた作品を、表に示した第五次に、国語科の授業として交流させていくことができる。

「総合的な学習の時間」と活動を関連させる場合

三年生が個人課題追求を行い、そのまとめ、発信の手段として新聞作りという活動を行わせる場合、第三次においてこの関連を図ることができる。

国語科では、「新聞作り」のための学習の手引きを作成する。その手引きを「総合的な学習の時間」を指導する教師に活用してもらい、そこで学んだことを国語科の授業で生かしていく。また、第三次の「資料収集の仕方や整理・加工の仕方」

は、「総合的な学習の時間」で指導することが可能なため、国語科の授業で学習の重複を避けることもできる。さらに、その逆の発想を用いれば、国語科で指導したことを、「総合的な学習の時間」で生かすこともできる。

教材・学習材の共有

国語科の単元で作り上げた作品「総合的な学習の時間」で作り上げた作品は、相互に生徒のための学習材としても共有することができる。時間的な関連だけではなく、学習材の関連も考えられるのである。

本単元のように、新聞という表現方法を用いる場合、学習の手引きだけではなく、実際に生徒が授業を通して作成した作品（次ページの例）を提示すれば、より具体的に完成の姿をイメージすることができる。

生徒たちは、できるだけその作品に近づきたい、さらによい作品にしたいという学習意欲をもち、こうした積み重ねによって、学習材は年々、その質を高めていくであろう。

国語科と「総合的な学習の時間」の関わり合い方は、時間・学習内容・学習材など多岐にわたる。学習材のように、ワンポイントの「点」として関わる場合もあれば、単元を通して学習内容を関わらせ合う「線」として、そして、価値ある大きなテーマを掲げ、全校を一つのステージとして考える「面」としても、関わり合いをもつことは可能である。

「総合的な学習の時間」が導入されて五年を迎える今、新しい国語科の単元を創造する意欲を、教師一人一人が自覚したものである。

実践事例 ②

国語科での学習を「総合的な学習の時間」に応用する

「人物紹介パンフレットを作ろう」(2年)

左ページの図に示したのは、教科書教材『人物紹介パンフレットを作ろう』(二年)を先行して実践し、その応用として「総合的な学習の時間」で「鎌倉遠足のための事前学習」を行った実践例である。国語科の時間に、情報の収集・整理・活用の方法を習得させた後、その指導を「総合的な学習の時間」に生かすには、どんな工夫があるかを紹介したい。

本校では、一年生の体験学習では、課題や資料は教師側で割り当てたので、自分で課題を決定したり、資料収集をしたリする方法が理解できていない学習者が多い。そこで二年生では、自ら必要な情報は何かを考え、収集・活用できる力をつけたいと考えた。

1 指導計画を立てるにあたって

年度当初に「総合的な学習の時間」の計画を見ながら、国語科と連携を図れる点は何か、どんな力をつけておく必要があるかを確認しておく。

今回の取り組みでは、国語科においても、「総合的な学習の時間」においても、目標として共通するものが多い。国語科でまず基本を身につけさせ、「総合的な学習の時間」のパンフレット作りに役立てていこうと考えた。

2 指導のための工夫点

■紹介する項目(切り口)を考えるヒント

生徒の関心・意欲を高めるために、教師が「人生を豊かにしてくれた人との出会い」というテーマで、「好きな作家」の紹介をする。その際、人物紹介の切り口となる項目——出会いのきっかけ・作家の生い立ち・自分が好きな作品・作家のエピソード・写真・名前の由来など——を理解させておく。項目立てのヒントは「手引き」の形で与えたい。この切り口が、「総合的な学習の時間」も含めたパンフレットの項目立てに役立つ。

■自分の課題が見つからない生徒への手立て

取り組む前に忘れてはならないのが、自分の課題が見つからない生徒への手立てである。具体的な手立てとして、「課題が決まった生徒に、選んだ人物とその理由を紹介させる」「友達同士で情報交換したり、アドバイスし合ったりする機会を設ける」ことなどが考えられる。また、課題は明確ではないが、こういう人を選びたいという生徒の声を聞き、教師がアドバイスすることも必要である。

■PCや図書室の活用のしかた

PCで資料を探すことは、ほとんどの学習者ができるようであるが、情報は正確に記するとともに、出所を明記することを指導する。PCから取り出した資料をそのまま写すだけで終わらないようにしたい。

また、図書室(図書館)の使い方が理解できていない場合は、本の配架場などを教えておく。また、調べた資料からどのようにメモをとるのか、「情報カード」(P22参照)を利用して情報収集のしかたを伝えておく。

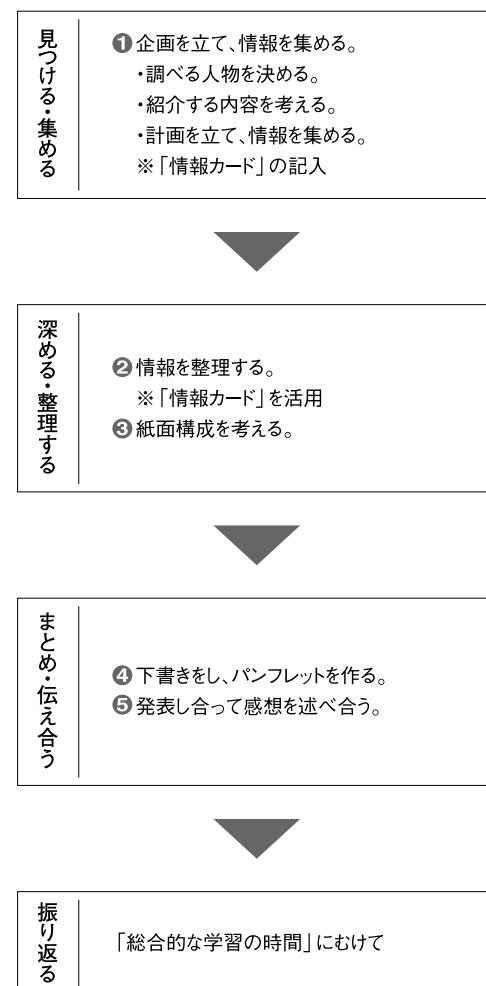
《国語科の流れ》

「人物紹介パンフレットを作ろう」

実施時期: 5月(10時間)

目標

- ① 目的や読み手に応じて、必要な情報を整理する。
- ② 伝えたいことが明確に伝わるように、効果的な紙面構成を考える。



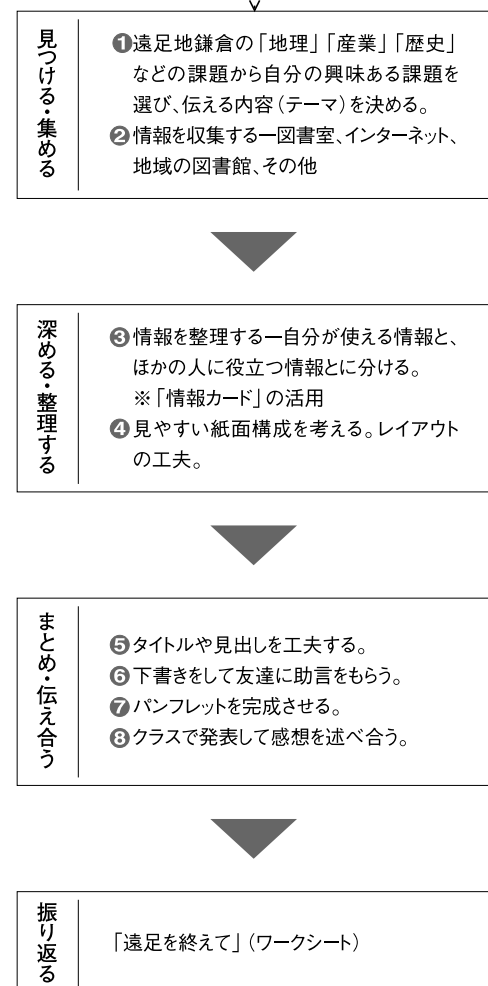
《総合的な学習の時間の流れ》

「鎌倉遠足のためのパンフレット作り」

実施時期: 6~9月(7時間)

目標

- ① テーマ学習に対する関心・意欲・態度を育てる。
- ② 調べ学習や発表に関する技能や表現の力を養う。
- ③ 遠足地の自然・風土・産業・歴史を知る。



■情報収集を効果的に

課題を決めたり、テーマを絞ったりするときの、参考にする資料の質と量が学習の成否の決め手となる。ここで活用したのが、例に示した「情報カード」である。ある課題のもとに、全員で情報を収集して記入する場合は、自分が使う資料だけでなく、ほかの人が使えるような情報も記入させるようにする。

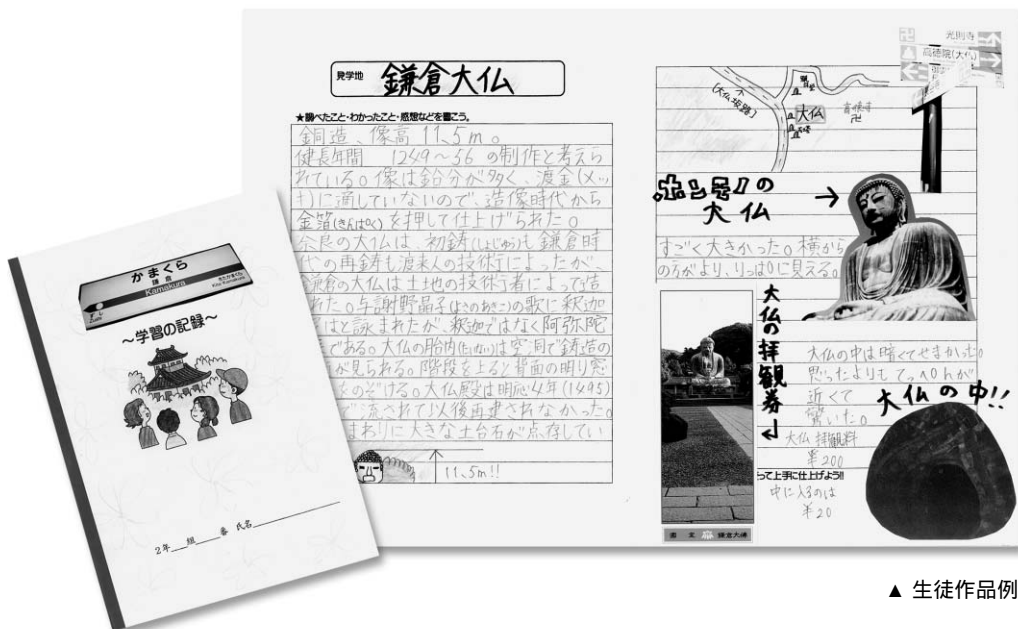
後でカードを見せ合うようにすると、情報の量も豊富になり、学習時間の短縮にもつながる。カードに記入するときは、必ず出典を明記させるようにする。

■タイトル・キャッチコピーの工夫

読み手を引きつける工夫として、タイトルやキャッチコピーの工夫も国語の力としてつけていきたい。「……について」のようなタイトルは、なるべく避けたい。読み手の心を引きつけるには、文末を「体言止め」「……動詞」にしたり、「擬人法」「オノマトペ」「倒置法」などの技法を用いたりする方法があることを指導する。実際にいくつかの実例で示すのが有効である。

情報カード			
NO. ()			
書名	著者	出版社	どこにあるか ☐ 図書室 ☐ 図書館 ☐ 個人 ☐ 他()
人物() ☐ 写真が多い ☐ 内容がわかりやすい ☐ 年表がある ☐ 魅力的な部分がある			
☐ その他			
この本のお薦めポイント(こんな事を紹介するのに役立ちそう)			
組 番 氏名			

▲情報カード



▲生徒作品例